

『方言論』の方法について

— 神部宏泰氏の書評を読んで —

柴田 武

本誌一六〇集に拙著『方言論』の書評が出た。評者がいわゆる「藤原方言学」派の一人と目される神部宏泰氏だけに、そこに展開される評言は、藤原方言学からの批判と受け取ることができよう。

藤原方言学に対する批判は、方言学者の間で口頭でささやかれることはあつても、藤原方言学VS非藤原方言学形で議論されたことではないように思う。私はかねてから藤原方言学を評価し、ものにもそのことを書いてきた。ごく最近では、藤原与一著『方言学の原理』の書評(日本教育新聞、一九八九年二月一六日号)を書いて、大いに評価している。ちなみに、その記事の見出しは「方言道家」藤原与一の哲学」となっている。

こうして、この機会に、藤原方言学から批判を受け、それに答えるという形で、学会誌の場で議論できることは、私にとつても、おそらく日本の方言学にとつても幸なことだろうと思う。

さて、本書が評者にとつてあらかじめ期待されたような書き下ろしの方言学体系論ではなく(五二二)、方言に関する論文集であるところがいろんな点で誤解または理解不足を招いていると思われる。あえて書評の評を記すわけである。

藤原方言学がそうであるように、評者も、「自然のままの対話が「第一級の資料」(五五五)で、それを「具体的な表現行為」(五五五)

として記述する立場に立つ。その立場からすると、私のやり方は、「方言の存在、方言の差異から出発する」(五二二)「在外的な」(五五五)立場ということになる。自然傍受法という方法で、一回限りの、具体的な、しかし、話者の属性はときにあいまいになる話を、話者に気づかれないように記録するのに比べて、一問一答式に答を引き出したり、仮説やモデルを設けて研究したり、ましてや、条件設定をする実験的方法は、言語の「人間性」を「喪失」(五四四)する懸念があるというのである。

一問一答式で得られる情報が話者の「こう話すつもりだ」という意識的な情報にすぎないことは承知している。しかし、言語地理学や言語社会学などでは、同類にして大量の情報を比較的短期間に獲得する必要がある。それには自然傍受法では間に合わないことがある。ある話者に一か年つきまともつても、自然傍受するだけでは、ついに、この人がメダカを何と言うかはもちろん、例えば「行くだの行かないだのぐずぐず言うな」の「だの」の部分はどう言うかもわからないで終ることも稀ではない。

一問一答式はやむをえない一つの方法ではあるが、その欠点を補う手当てはいろいろ講じられている。答そのものについての話者のコメントにも、答同様の情報価値を認めることなどがある。糸魚川で、助動詞「ない」について聞き出したときに、「言ワントワ言ワン」という答があった。これは、この人の実際の行動では「言ワン」と言っているという情報とすることもできる上に、「言ワン」と「言ワナイ」などの間に文体上の差(例えば「言ワン」のほうが、悪いことば)があるらしいことを暗示する情報とすることもできる。

仮説やモデルは、構造の記述的研究には必要ないが、評者の言う

「表現行為」の研究となれば、情報単位が大きいことと、情報が混質的であることから、どうしても仮説やモデルを設ける必要がある。社会言語学はふつうこの方法を採用。その仮説が「現象を把握するのに適しているかどうかは」(五四べ) 実はこちらはわかっていない。だから、ましてや、最適の方法となると、初めにはわかっていない。だから、まず、最適と「思う」仮説によって分析してみ、その上で「自然な言語現象」に当たって、もし十分に説明できれば、それでよし。でなければ、改めて別の仮説を立てて挑戦し、それをくり返すうちに最適の方法が見つかり、その方法によって分析したものが最終結論になるという考え方である。

実験的方法について、私が「いわゆる『やらせ』をやる」というのである」と、俗な表現ですばり説明したことに評者は不快感を表している(五五べ)。そして、このようにして資料を得るのは「やはり後めたさを覚え」たとのこと。社会言語学的に研究する場合には、実験的方法が採れば、それはきわめて有力な検証法で、この点では、人文、社会科学も自然科学と変わらないサイエンスである。

サイエンスの他の一つの特徴は、後人に追試を許すことである。そのためにも、情報を全部公開し、分析の手段なり手順を明示する必要がある。長年の知識の蓄積があつてのことでも、直観で全体を把握して、ただちにそれを結論とするのでは、後から追試ができない。したがって、批判のしようもない。それでは、成果を積み重ねていつそう高い段階へ進むことも期待できないのである。かつての方言区画論はそういう性質のものであつた。

直観による総合的な判断は、実は日本人の得意とするところで、その結果も、結論として大体のところ正しいことが多い。サイエン

スは、たとえ直観で全体をつかんでいても、一つ一つの情報や分析結果を積み重ねて結論を出す。サイエンスは、遠回りな、手のかかる方法ではあるが、だれにでもできるはずという点特徴である。私は、日本人風に直観的把握をした上で、サイエンス式の論証をすべきだと考えている。そのことは、評者も引用している本書の「はしがき」に述べている。

評者は、私が「記述的研究」と言語的地理学などの「説明的研究」との関係はどう見ているのか、そこところが「不透明」だと述べている(五三べ)。私は、まず記述的研究をして、ついで説明的研究をするという順序を考えている。記述だけでは不十分で、なぜそうなっているかを説明すべきだという考えである。生成文法は説明の段階まで進んでいる点が評価される。しかし、一方、記述を伴わない説明は、部分的で、全体的把握を誤まるおそれがある。(注)

これからの方言学に期待することの一つに「一方言の完全な記述」をあげたのは、記述的研究も各方言の部分々々については行われているが、一方言の完全記述は、いまでも数えるほどしか完成していない。だから、それを近い将来に期待するのである。それが終つて、次に説明的な研究ということを考えている。しかし、この順序は論理的な順序で、実際には、記述し、説明するという同時進行もありうるし、むしろ、そのほうが望ましい。

構造研究が人間的捨象することについても評者は疑念を表明している。構造研究が捨象する「人間」は、「ひとりひとりの顔の見える」丸ごとの人間であつて、その人の属性とされる性・年齢・居住地・居住歴・学歴などは最後までラベルとして残される。その言語と属性との関係となれば、それを研究するのは社会言語学である。

評者が言う「人間性への関心を深めたい」(五六ペ)構造論とは、具体的にどういうものか理解できない。あるいは、「構造」の概念について理解のくい違いがあるかもしれない。「構造」は、言語を建築物のようなモノとひとまず見たてて、その部分と部分との関係、全体の設計(組み立て)を見ようとする考えから出た概念と理解している。

「言語地理学は、構造分析で失われた人間を復活させようとする。」という私の発言を「いささか筋違いの感じがなくてもない。」と評する(五七ペ)。まず、私の一文は、言語学遍歴における順序に沿って述べたものである。構造分析では人間を捨象せざるをえないが、言語地理学では人間との関係を扱うことができるという意味である。評者の「筋違い」というのがわからない。

次に、評者は「強度の分析による、人間性要素の喪失」(五四ペ)をおそれている。私が分析しすぎるといっているのである。サイエンスは、とことん分析する。物理的世界では原子にまで到達した。言語地理学で分布を求めるのに、語の前半部と後半分とを分けて二枚の地図を描くと、語全体として描いては出てこなかった有意味な分布があらわれることをしばしば体験している。この場合は、おそらく、語全体の情報に何か不要な情報がまじっていたことから起こったことで、そのことは分析して分布図を作つて初めて判明する。もちろん、分析したものは総合して、つまり、地図を重ねて、語全体について、その真の分布をつかむのである。

自然のままの具体的現象を忠実に記録し、それを積み重ねて、そこから、いわば「哲学的に」本質把握をするのも一つのやり方であるが、サイエンスのように、それはだれにでもできる方法ではない。

言語地図にしても、現象をすべて、そのまま、細部にわたる情報一切を記入するのでは、多くの人にとっては有意義な分布は見届けられないことがある。「分類」という、情報の捨象と統合による一種の分析がどうしても必要である。

「人間を復活させるといふのは、話者の立場から言語を見直すということである。」という発言に対して「話者の立場から言語を見直す」とはどういうことなのか。」という問が出ている(五五ペ)。これは、五六ペで評者自ら「民衆語源」に注目することは、話者の立場に立つことになるのであろう。」と述べている。その通りである。民衆語源だけでなく、話者の内省による新・古、上品・下品、方言・共通語などの情報を重く扱う。方言か共通語かも、われわれ研究者の判断によらず、話者にとつての方言、話者にとつての共通語として扱うこともあるということである。

また、言語地理学では「言語使用者にとつての具体的単位と考えられる「語」を単位に取りあげる」という発言に対して、「語」を具体的単位と考えるのは、いくらか無理があるのではなからうか。」(五五ペ)と評する。私の発言の意味は、一方で、言語地理学は、たとえ「文法」を扱っても、単位を「語」の形でしかとり扱えないことと、一方で、取りあげる最小単位は、話者にとつては、意味の最小単位である形態素ではなく、といって、語の集合の文節や文でもない。ましてや、談話(文章)ではないことにある。「語」の定義は定まったものがないが、ここでは仮に、話者にとつて具体的な(客観的に分析したあげくのものではない)最小単位としたのであった。

以上、個々の評言に対して私見を述べてきたが、思うのに、私が構造研究もやり、言語地理学的研究もやっていると、ときに両者の比

較もしていることが評者の理解を混乱させたのかもしれない。評者は、ある地域の「ことばの総体・体系」の「記述的研究・体系的研究」を「重要な分野」（五四ペ）として、それに専念してられるかに見える。その立場からの評言のために一種の行き違いが起こつてゐる。

なお、五六ペの九州各地方の方言の個別の現象についての指摘は何も言うことはない。すべて教わるのみである。今後、改訂する機会があれば、他の研究も加えて、いっそう妥当な記述に近づけたい。

藤原方言学とその他の方言学とは、一方が一方を否定する関係にはなりえないし、妥協や融合の余地はないように思われる。一方は哲学へ向かう道、一方はサイエンスを旨ざす道だからである。しかし、いずれも方言を対象とする学であつて、サイエンスのほうが階段を昇りつめて哲学に近づく日はあると思う。

注 この一文を本誌に投稿すると同時に、評者の神部宏泰氏にそのコピーを送つて、書評の評を書くことを断わり、かつ、間違つてゐるところがあつたら指摘してほしいとお願いした。そのうちで、明らかに誤解してゐたのは、評者の「記述的研究の、ある不透明さ」（五三ペ）という文言である。神部氏によれば、これは、「記述的研究そのものが、一般に、「不透明」な性格をもつてゐる」ことで、「一種のもどかしさ（混質的な現象に接しての）」に発するものか」とのことである。（一九九〇年四月十六日付けの小生あて私信）筆者などは、社会言語学や言語地理学のほうがはるかに混質的な現象を対象にしていて、それだけに「不透明」であるが、記述的研究は属性的なものを省くために、むしろその性格は「透明」ではないかとさえ思う。記述的研究そのものの内容・方法が筆者とは違つてゐるらしい。（一九九〇・六・二一）